

自己愛タイプ別の自我脅威場面における 攻撃表出プロセスについて

鈴木比香乃 信州大学大学院教育学研究科学学校教育専攻臨床心理学専修
高橋知音 信州大学学術研究院教育学系教育科学グループ

概要

本研究では、過敏型自己愛の攻撃表出に至るプロセスを解明するために、自我脅威場面において喚起される恥や不安が攻撃表出に与える影響を、過敏型と誇大型の高低を組み合わせた4タイプごとに比較検討した。大学生266名を対象に無記名の質問紙調査を実施した結果、過敏型と誇大型の傾向がともに高いと、恥や不安は攻撃表出の抑制という適応的な働きをするが、過敏型の傾向のみが高い場合は、恥や不安が攻撃表出を促進するという不適応的な働きをすることが示された。

キーワード：自己愛、誇大型、過敏型、自己本位性脅威モデル、攻撃

問題と目的

自己愛

自己愛という概念は、もともと精神疾患の診断・統計マニュアル (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, DSM) における自己愛性人格障害のような人格の障害を示すために用いられてきた。しかし、非臨床群においても自己愛傾向は見られ、特に青年期にその傾向が高まるといわれている。青年期における自己愛の高まりは自己の発達のために必要なプロセスであるが、自己愛性人格障害のように不適応な形で自己愛的特徴があらわれる場合もある。そして不適応な自己愛は、様相の違いから「誇大型」と「過敏型」という2つのサブタイプに大別される Gabbard (1994 館訳 1997)。誇大型は傲慢で周囲の反応に鈍感な自己愛のタイプであり、過敏型は抑制的で周囲の反応に敏感な自己愛のタイプである。

自己愛と攻撃性

誇大型自己愛は、その状態像から派手な行動をとることが予測されるため、様々な研究で攻撃行動との関連が検討されてきた。中でも Baumeister, Smart, & Boden (1996) は、「自己本位性脅威モデル (threatened egotism model)」という自己愛者が攻撃行動に至るプロセスモデルを示している。自己本位性脅威モデルでは、不安定かつ不確実な好ましい自

己表象を持つ者、つまり自己愛者が周囲から否定的評価を受けた際に、その評価と自己表象との差異によって自我脅威を知覚し、自身の自己評価を維持するための防衛的な反応として攻撃行動が表出されるというプロセスが示されている。本邦でも多くの研究で自己愛と攻撃性の関連が示されているが、Baumeister et al.(1996)の自己本位性脅威モデルを含めそのほとんどが誇大型を自己愛として扱っており、過敏型は考慮されていない。しかし中川(2003)は、近年の過剰な攻撃性を伴った事件の加害者は「普段はおとなしい子」「学校生活は真面目」と周囲から評価されていたことを報告している。自己本位性脅威モデルが過敏型自己愛にも適用されると仮定すると、このような意外な攻撃行動は、過敏型が自我脅威を経験したことで生じた可能性が考えられる。実際に過敏型は攻撃性と関連があることが示されており、特に自分に向けられる自己破壊的な攻撃に影響を与えていることが明らかとなっている。

感情・攻撃の方向性を加味した攻撃行動の表出プロセス

以上から、誇大型だけではなく、過敏型も攻撃性との関連があることが示唆されるが、過敏型が攻撃行動を表出するに至るプロセスを実証的に検討した研究は少ない。過敏型が攻撃行動を表出するプロセスの仮説として自己本位性脅威モデルが考えられるが、自己本位性脅威モデルでは自我脅威が知覚された際に生じる感情や、その感情が攻撃行動表出に与える影響については考慮されていない。

自己本位性脅威モデルに感情の影響を加味して検討を行った研究に、藤野(2014)がある。藤野(2014)は、自我脅威を知覚したときの感情として不安と怒りを取り上げ、他者からの否定的評価によって自我脅威を知覚した際に不安が生じ、それを軽減させる試みが怒りを生じさせ、攻撃行動につながるという仮説を立て、検討した。その結果、自我脅威を知覚すると不安が生じることで怒りが喚起され、不安から攻撃行動の表出を抑制しようとするが、怒りをうまく処理できず内にとどめたまましていると結果的に攻撃行動が表出されるということが明らかとなり、自我脅威を経験した際には不安が攻撃行動に影響を与えることが示された。

このように、自己本位性脅威モデルをもとに攻撃行動の表出に至るプロセスを検討する際に、自我脅威によって生起する感情も含めて検討することで、より詳細なプロセスモデルが明らかになるといえる。したがって、過敏型自己愛が攻撃行動に至るプロセスを検討する上でも、生起する感情も考慮したモデルを考える必要があるだろう。しかし、藤野(2014)のモデルは、自己愛の高低関係なく全対象者で検討されたため、そのまま過敏型に当てはまるかどうかは定かではない。また、藤野(2014)のモデルにおける攻撃行動は、自分以外の物や他人への物理的または言語的攻撃、つまり「他への攻撃」であるが、過敏型は他への攻撃だけではなく、「自己への攻撃」も表出しやすいことが示されているため(蛭田, 2014; 山崎, 2008; 渡邊, 2009), 藤野(2014)のモデルにおける攻撃行動に自己への攻撃も含めた検討を行うべきだろう。

ところで、岡野（1998）が自己愛を「恥の病理」と述べているように、恥は自己愛の中心の特徴であるといわれている（Lewis, 1992 高橋訳 1997 ; Tracy & Robins, 2004）。そして、恥は失敗を経験した時に抑うつなどの精神病理反応を喚起したり（有光, 2001）、他者を責めるという防衛的な怒りを生じさせることが示されている（Tangney, Wagner, Fletcher, & Gramzow, 1992）。したがって、過敏型自己愛が攻撃行動を表出するに至るプロセスを検討する上で、藤野（2014）が想定した不安と怒りに加え、恥も考慮に入れるべきだと考えられる。

本研究の目的

そこで本研究では、藤野（2014）のモデルを参考に新たに恥と自己への攻撃を加えたモデルを作成し、過敏型自己愛が自我脅威経験時に攻撃表出に至るプロセスを検討することを目的とした。過敏型の攻撃表出に至るプロセスの特徴をより明確にするため、過敏型の攻撃表出に至るプロセスの特徴をより明確にするために、誇大型との比較検討を行う。過敏型と誇大型は純粋な状態よりも混合した状態で表出されることが多いといわれているため（Gabbard, 1994 館訳 1997）、単に過敏型と誇大型で比較をするのではなく、過敏型と誇大型の高低の組み合わせで自己愛を4タイプに分け、攻撃表出に至るモデルを比較する。

想定されるモデル

作成した自己愛の攻撃行動表出プロセスモデルを図1に示す。細線で示されているパスは藤野（2014）の結果で明らかとなったパスであり、太線で示されているパスは今回新たに想定したパスである。「怒り制御」は怒りを外に出さないように怒りをしずめたりしようとすることであり、「怒り隠蔽」は怒りを表出せずにそのまま内に留めておくことである。

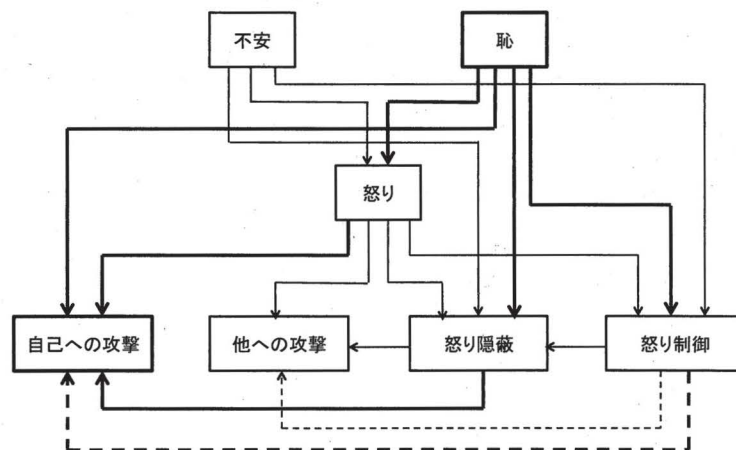


図1 想定される攻撃行動表出に至るプロセスモデル

自己愛のタイプによってパスの出方が異なると仮定し、具体的な仮説を以下に示した。

仮説① 自己愛性人格障害は恥を中心的特徴とする障害であると言われているため、自己愛が高い者においてのみ恥が不適応なあらわれ方をし、恥が怒りや自己への攻撃を促進すると予測される。

仮説② 誇大型も過敏型も低い者は、不安によって怒りが喚起され、攻撃行動に至るが、恥が適切に働いて怒り制御が促進され、攻撃行動を抑制すると予測される。

仮説③ 誇大型のみが高い者は評価への過敏性を持たないことや、怒りの表出は正当だと捉えていることが示されているため、恥や不安によって怒り制御や怒り隠蔽が促進されないと予測される。

仮説④ 過敏型のみが高い者は、他者から否定的に評価された時に自責的になると考えられるため、不安や恥が怒りに影響を与えず、怒り隠蔽と怒り制御に影響を与えると予測される。また、怒り隠蔽は他への攻撃と自己への攻撃に影響を与えると予測される。

仮説⑤ 誇大型と過敏型の両方の傾向が強い者はより不安定な者と考えられるため、恥が怒りや自己への攻撃を促進すると予測される。また、両方高い者は周囲の評価を恐れる過敏型の特徴も持っているため、恥と不安が怒り制御や怒り隠蔽を促進すると予測される。そして怒り制御は恥によって促進される自己への攻撃を抑えようとするが、怒り隠蔽が他への攻撃を促進させるように、自己への攻撃も促進させると予測される。

方法

対象者

国立大学生 266 名のうち、無効な回答と判断した 1 名を除いた、265 名（男性 161 名、女性 100 名、性別不明 4 名）。平均年齢 20.62 歳（SD=2.09）。

手続き

無記名の質問紙調査を実施した。質問紙の構成として、自己愛を測定する質問紙に回答してもらった後、自我脅威を喚起させる文章を提示し、その場面に自分が居合わせたと想定させ、その時の感情（恥、不安、怒り）と対応（他への攻撃・自己への攻撃・怒りの隠蔽・怒りの制御）を測定する質問紙に回答を求めた。

材料

1) **自己愛** 中山・中谷(2004)によって作成された評価過敏性-誇大性自己愛尺度を使用した。この尺度は 18 項目で構成されており、「誇大性」と「評価過敏性」の 2 下位尺度を持つ。「誇大性」は誇大型自己愛を測定し、「評価過敏性」は過敏型自己愛を測定する。中山・中谷(2004)にしたがい 5 件法で回答を求めた。

2) **自我脅威場面** 自我脅威を喚起させる場面として、藤野(2014)によって作成された 2 つの自我脅威場面を使用し、参加者には 2 つのうちどちらか 1 つの場면을提示した。どちらの場면을提示するかはカウンターバランスをとった。場面の内容は以下の通りである。

場面1：あなたが自信をもってある意見を出したところ、友達みんなから「全然わかっていない」と馬鹿にされ、結局違う人の意見が採用されました。

場面2：勝てると確信した勝負で、あなたは、相手が年下であるにもかかわらず負けてしまい、その勝負を見ていた大勢の年下の人たちからも、「情けない」と笑われてしまいました。

3) 恥 樋口 (2002) の恥の下位情緒尺度を使用した。この尺度は 17 項目で構成されており、樋口 (2002) にしたがって 4 件法で回答を求めた。

4) 不安 寺崎・岸本・古賀 (1992) の多面的感情状態尺度における不安に相当する下位尺度のうち、出来事に対して生じる感情として適切だと考えられる 5 項目を使用した。寺崎・岸本・古賀 (1992) にしたがって 4 件法で回答を求めた。

5) 怒り 寺崎・岸本・古賀 (1992) の多面的感情状態尺度における怒りに相当する下位尺度のうち、出来事に対して生じる感情として適切だと考えられる 5 項目を使用した。寺崎・岸本・古賀 (1992) にしたがって 4 件法で回答を求めた。

6) 他への攻撃・怒り制御・怒り隠蔽 State-Trait Anger Expression Inventory-2 (STAXI-2) のうち怒り行動的側面を測定する怒り表現・制御尺度を藤野 (2014) が翻訳したものを使用した。この尺度は 32 項目であり、「怒りの表出」、「怒りの制御」、「怒りの隠蔽」の 3 下位尺度から構成される。「怒りの表出」は他への攻撃に当てはまる。藤野 (2014) にしたがって 4 件法で回答を求めた。

7) 自己への攻撃 安立 (2001) の攻撃性質問紙から、自傷欲求を測定する 4 項目を使用した。安立 (2001) にしたがって 5 件法で回答を求めた。

分析

はじめに自己愛尺度における誇大性と評価過敏性それぞれを中央値で高・低群に分割し、誇大性の高・低群、評価過敏性の高・低群とした。そして、誇大型と過敏型の高低によって各尺度得点に差があるかどうか検討するため、各尺度を従属変数、誇大性 (高・低) × 評価過敏性 (高・低) を独立変数とする 2 要因分散分析を行った。

次に、誇大性得点の高低と評価過敏性得点の高低を組み合わせで参加者を 4 群に分け (誇大 (高)・過敏 (高)、誇大 (高)・過敏 (低)、誇大 (低)・過敏 (低)、誇大 (低)・過敏 (低))、群による攻撃表出に至るプロセスの違いを検討するために、共分散構造分析を行った。

倫理的配慮

本研究は、信州大学教育学部研究委員会による倫理審査および承認を受けて実施された (管理番号：H29-19)。

結果と考察

自己愛のタイプによる各尺度得点の違い

恥, 不安, 怒り, 怒り表出, 怒り制御, 怒り隠蔽, 自傷欲求を従属変数とし, 誇大型 (高・低), 過敏型 (高・低) を独立変数とする多変量 2 要因分散分析を実施した。その結果、全従属変数において、誇大性の主効果と評価過敏性の主効果が有意であり (Pillai's Trace = .06, $F(7, 255) = 2.19$, $p = .036$; Pillai's Trace = .18, $F(7, 255) = 8.04$, $p < .001$), 誇大性と評価過敏性の交互作用が有意傾向であった (Pillai's Trace = .05, $F(7, 255) = 1.95$, $p = .063$)。そこで、従属変数別に一変量分散分析を行ったところ、不安と怒り隠蔽において有意な交互作用がみられたため ($F(1, 261) = 5.20$, $MSE = 55.52$, $p = .023$, $\eta^2 = .02$; $F(1, 261) = 7.87$, $MSE = 108.60$, $p = .005$, $\eta^2 = .03$), 単純主効果検定を実施した。

その結果、不安については、誇大 (低) 群における評価過敏性の単純主効果が有意であり ($F(1, 261) = 28.23$, $p < .001$), 誇大 (低) 群においては評価過敏性が高い方が不安が高かった。また、誇大 (高) 群における評価過敏性の単純主効果が有意であり ($F(1, 261) = 4.61$, $p = .033$), 誇大 (高) 群においては評価過敏性が高い方が不安が高かった。また、過敏 (高) 群における誇大性の単純主効果が有意であり ($F(1, 261) = 1.46$, $p = .043$), 過敏 (高) 群においては誇大性が低い方が不安が高かった。

怒り隠蔽については、誇大 (低) 群において評価過敏性の単純主効果が有意であり ($F(1, 261) = 35.95$, $p < .001$), 誇大 (低) 群においては評価過敏性が高い方が怒りを隠蔽する傾向にあった。また、誇大 (高) 群において評価過敏性の単純主効果は有意であり ($F(1, 261) = 4.37$, $p = .037$), 誇大 (高) 群においては過敏が高い方が怒りを隠蔽する傾向にあった。また、過敏 (低) 群において誇大性の単純主効果が有意であり ($F(1, 261) = 6.29$, $p = .013$), 過敏 (低) 群においては誇大性が高い方が怒りを隠蔽する傾向にあった。

次に、交互作用がみられなかったものについて主効果検定を行ったところ、恥, 怒り, 怒り表出, 自傷欲求において評価過敏性の主効果が有意であり ($F(1, 261) = 28.47$, $MSE = 2472.49$, $p < .001$, $\eta^2 = .10$; $F(1, 261) = 10.02$, $MSE = 142.08$, $p = .002$, $\eta^2 = .04$; $F(1, 261) = 9.26$, $MSE = 148.51$, $p = .003$, $\eta^2 = .03$; $F(1, 261) = 15.25$, $MSE = 247.38$, $p < .001$, $\eta^2 = .06$), 評価過敏性が高い方が恥, 不安, 怒り, 怒り表出, 怒り隠蔽, そして自傷欲求が高かった。

以上の結果から、他者からの否定的評価という自我脅威を経験した時、過敏型の特性を持っていると不安や恥, 怒りを感じやすいだけではなく、怒りを抑圧しようとする傾向や自他への攻撃行動を表出する傾向が高まることが明らかとなった。不安や恥の感じやすさ、そして怒りを外に出さずに内に留めようとする傾向の高さは過敏型自己愛の特徴と一致する結果であった。一方で、怒りや攻撃行動を表出する傾向も高まるという過敏型自己愛の特徴からは想像し難い結果も得られた。この結果から、過敏型自己愛にも自己本位性脅威モデルが当てはまると考えられ、誇大型よりも過敏型の傾向が高いほど、自我脅威知覚時に防衛的反応としての攻撃行動が強く表出されると考えられる。また、不安と怒り隠蔽においては、誇大型と過敏型が両方高い者よりも誇大型が低く過敏型が高い者の方が得点が

高かったことから、誇大型の特性は不安を下げ、怒りを抑圧する傾向を弱める機能を持つ可能性がある。

自己愛のタイプ別の攻撃表出に至るプロセス

自己愛の4つの群ごとで怒り表出に至るプロセスモデルを比較するため、仮説のモデルを用いて多母集団同時分析を行った。その結果十分な適合度が得られなかったため、修正指標を参考に5%水準で有意でないパスを削除するなどの操作を行った。その結果十分な適合度を得られたモデルを最終モデルとし(図2)、群間でモデルを比較した。誇大(低)・過敏(低)群のモデルを図3、誇大(低)・過敏(高)群のモデルを図4、誇大(高)・過敏(低)群のモデルを図5、誇大(高)・過敏(高)群のモデルを図6に示す。

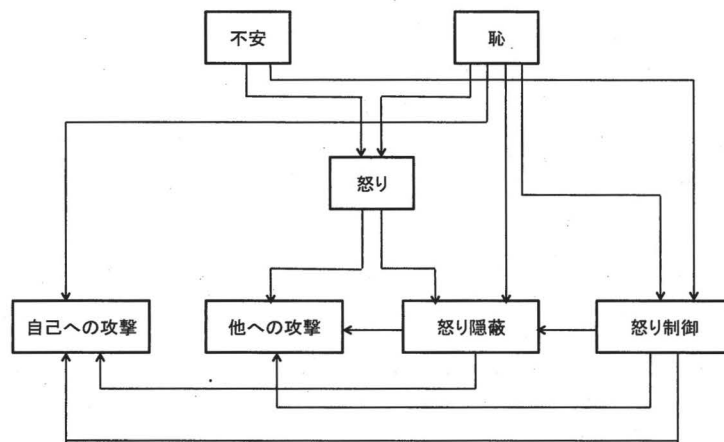


図2 多母集団同時分析における最終モデル

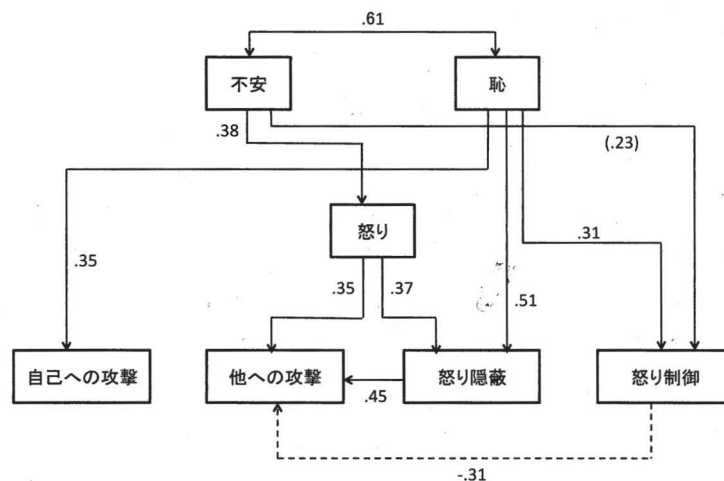


図3 誇大(低)・過敏(低)群のモデル

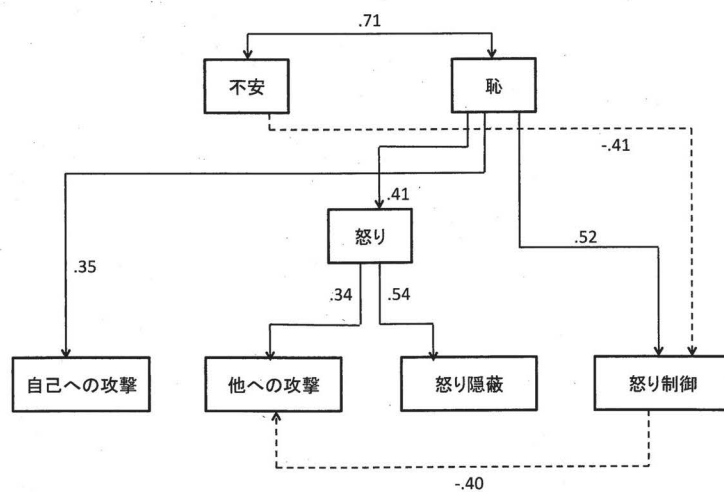


図4 誇大（低）・過敏（高）群のモデル

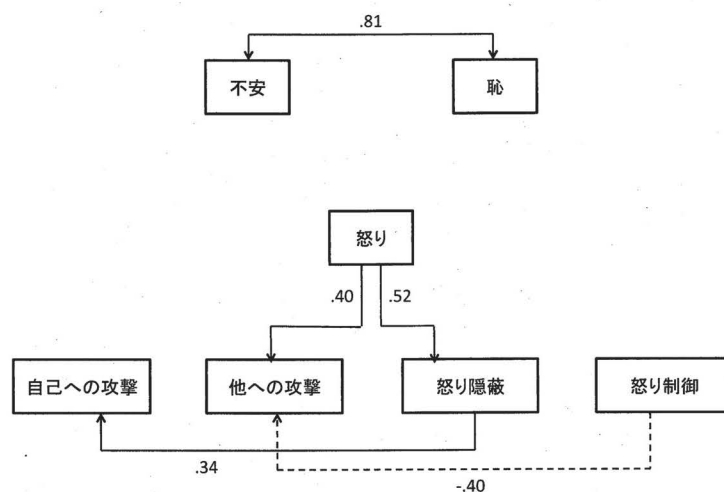


図5 誇大（高）・過敏（高）群のモデル

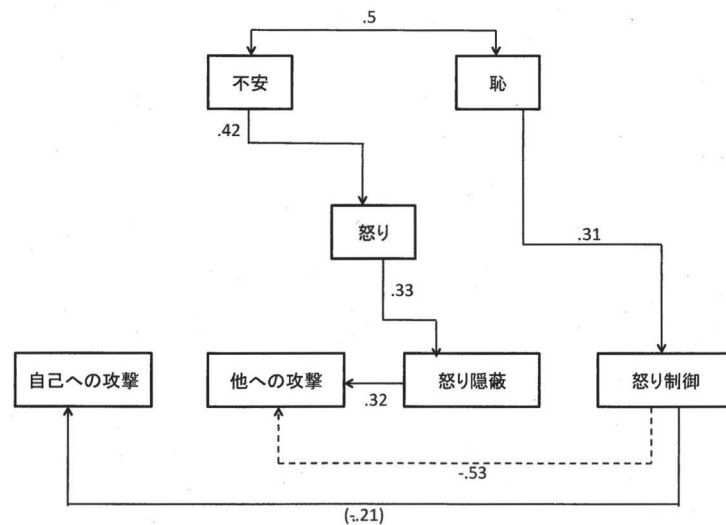


図6 誇大（高）・過敏（低）群のモデル

本研究の結果から、仮説②と③は支持され、①も部分的に支持されたが、④と⑤は支持されなかった。このような結果になった理由を明らかにするため、自己愛のタイプごとに検討を行う。

まず、過敏型が低い2つのタイプについて、誇大（高）・過敏（低）タイプ（図6）では、不安と恥による攻撃行動への影響は見られなかった。誇大（低）・過敏（低）タイプ（図3）では、不安と恥は他への攻撃を促進していたが、同時に他への攻撃を抑制する働きをしていた。誇大（低）・過敏（低）タイプは他のタイプに比べて不安得点が低いことや、過敏（低）は過敏（高）よりも恥得点が低いことが本研究で明らかとなっており、誇大（低）・過敏（低）タイプは他者から否定的評価を受けても不安や恥が過度に高まらないことが示唆される。そして、適度な不安と恥は適応的な行動制御の機能を持つことから（伊豫, 2009 ; Frank, 1988 山岸訳 1995), このタイプでは適度に喚起された不安や恥が他への攻撃の抑制という適応的な働きをしたと考えられる。一方で、恥は自己への攻撃を促進しているが、過敏型の傾向が低い者は高い者よりも自己への攻撃をする傾向が低いことが本研究で明らかになっているため、過度な自己への攻撃は表出されないと考えられる。自己への攻撃が持つ機能について、高橋・藤生（2015）は非行少年を対象とした調査で、自傷行為には「不安な気持ちを和らげたかった」といった感情調整の機能があることを示している。したがって、ここで表出される自己への攻撃には、否定的評価によって感じた恥を紛らわせるという感情調整の機能があると推測できる。

次に、過敏型が高い2つのタイプについて、誇大（高）・過敏（高）タイプ（図5）では、不安が間接的に他への攻撃を促進する一方で、恥は間接的に自他への攻撃を抑制していた。つまり、このタイプにおいては恥が適応的な行動制御の機能を果たしていることが示唆さ

れる。しかし、誇大（低）・過敏（高）タイプでは（図 4），恥は他への攻撃を抑制する一方で、自己への攻撃を促進し、さらに怒りを喚起することで他への攻撃を促進していた。

このように誇大（高）・過敏（高）タイプとは異なる結果が見られた理由として、本研究における誇大型の高さは適応的機能を持っていた可能性が考えられる。日本では、他者に対して自己卑下的な振る舞いや謙遜を行うことで周囲から肯定的に評価されるため（吉田・浦, 2003），自分を下げて表出する過敏型の自己愛者が多く見られ，自らの魅力を誇張してアピールするような誇大型の自己愛者は比較的少ない可能性がある。また，そのような環境の中で過度な誇大型の特徴を持つ者は，生活上で重篤な不適応を示している可能性があり，臨床群に含まれるかもしれない。本研究は非臨床群を対象としたアナログ研究であるため，過度に高い誇大型の特徴を持つ者は抽出されなかった可能性がある。したがって，日本人は誇大型の高さが全体的に低く，非臨床群において誇大型が高い者はあくまで日本人における平均よりも高いということであるため，病的に誇大というよりもむしろ他の人よりも自信を持っていると捉えられるレベルだと考えられる。また，過敏型自己愛が誇大型と自尊感情は自己に対する肯定的評価という点で共通していることから（中山, 2008），適度な誇大型の高さは適応性を促進すると考えられる。

以上から，誇大（高）・過敏（高）タイプは過敏型の高さから他者からの否定的評価によって恥を感じやすいが，誇大型の高さが恥の不適応的機能を抑制したと考えられる。対して，誇大（低）・過敏（高）タイプは誇大型が低いために過敏型の高さによって生じる恥の不適応的機能を抑制できず，恥が攻撃行動を促進したと考えられる。また，誇大（低）・過敏（高）タイプは不安が怒り制御を抑制することで他への攻撃を促進していた。不安が高まるとワーキングメモリが不安に占められるため（Amir & Bomyea, 2011），認知容量が不足し，思考の切り替えが困難になると考えられる。したがって，このタイプでは他者から否定的評価を受けた際に，不安が高まることで気を紛らわせることができなくなり，他への攻撃を抑えられなくなると考えられる。

まとめと本研究の意義

本研究の結果から，自己愛のタイプによって自我脅威知覚時に喚起される感情の強さや，その感情が攻撃行動に与える影響が異なることが示された。そして，過敏型の特徴を持っていても誇大型の特徴も持っている場合は他者から否定的評価を受けても行動をコントロールできるが，過敏型の特徴のみを持っている場合は自他への攻撃行動が表出しやすくなることが示された。この結果は，過敏型自己愛は自他への攻撃行動と関連があるという先行研究（蛭田, 2014；渡邊, 2009；山崎, 2008）を裏付け，中川（2003）が報告する「普段おとなしい子が突然の過剰な攻撃性を伴った事件の加害者へと変貌する」メカニズムの一端を解明するものとなった。つまり，過敏型の特徴を持ち，自信がない人は，普段は大人しい人だと周囲から認識されているが，他者から否定的な評価を受けたときは，恥や不安を強く感じることで怒りを抑制できなくなり，攻撃行動に至ると考えられる。このよう

なタイプの者の過剰な攻撃行動を抑制するためには、怒りや攻撃行動自体へのアプローチよりも、不安と恥を低減させるようなアプローチが効果的だといえるだろう。

本研究の限界点と今後の展望

最後に、本研究における限界点について言及する。本研究では誇大型自己愛の病理性が見られなかったが、その原因として、本研究が非臨床群を対象としたアナログ研究であったことに加え、本研究で使用した自我脅威場面では誇大型自己愛の者は自我脅威を感じなかった可能性が考えられる。誇大型自己愛の者は共感性が低いことが示されており（宮下, 1991）、設定された場面に自分がいることを想定できなかった可能性がある。また、誇大型は、他者との親和的な関係よりも競争によって自らの優越性を示したいという欲求があることが示されており（川崎・小玉, 2011）、誇大型の者は、他者との親密性よりも競争によって他者よりも優位に立つことを重視していると考えられる。したがって、誇大型の者は、他者から否定的評価をされる場面を想定したときよりも、実際に他者と競争をし、敗北を経験した時に自我脅威を知覚する可能性が考えられる。そのため、他者との競争場面における敗北という状況であれば、誇大型の病理性が見られる可能性があるだろう。

また、本研究では、不安、恥、怒りといった感情や攻撃行動の量的な高低のみを測定しており、具体的な内容については触れていないため、今後は質的調査によってその内容の違いを検討する必要があるだろう。

引用文献

- 安立 奈歩(2001). 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 475-487.
- Amir, N., & Bomyea, J. (2011). Working memory capacity in generalized social phobia. *Journal of Abnorm Psychology*, 120, 504-509.
- 有光 興記(2001). 罪悪感、恥と精神的健康との関係 健康心理学研究, 14, 24-31.
- Baumeister, R., Smart, L., & Boden, J. M.(1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Frank, R. H. (1988). *Passions within reason : The strategical role of emotions*. New York : Norton.
- (山岸俊男(監訳)(1995). オデッセウスの鎖—適応プログラムとしての感情— サイエンス社)
- 藤野 京子(2014). 否定的に評価された場面における怒り表出に至るプロセスの解明について—自尊心や不安の影響を加味した分析— 犯罪心理学研究, 52, 47-58.
- Gabbard, G. O.(1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV version*. Washington: American Psychiatric Press.

- (ギャバード, G. O. (著) 館哲郎(監訳)(1997). 精神力動学的精神医学—その臨床実践[DSM-IV版]—③臨床編: II 軸障害 岩崎学術出版社)
- 蛭田 陽子(2014). 無関心型および過敏型自己愛傾向と攻撃性との関連: 外向・内向攻撃性および個人の内的過程に着目して 弘前大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 樋口 匡貴(2002). 公恥状況及私恥状況における恥の発生メカニズム—恥の下位情緒別の発生プロセスの検討— 感情心理学研究, 9, 112-120.
- 伊豫 雅臣(2009). 不安の病 星和書店
- 川崎 直樹・小玉 正博(2011). 親和・競争欲求からみた自己愛傾向と自尊心—欲求の充足度という観点を加えた検討— カウンセリング研究, 44, 209-215.
- Lewis, M.(1992). *Shame: The exposed self*. New York: Free Press.
- (レイス, M.(著) 高橋恵子(監訳)(1997). 恥の心理学—傷つく自己 ミネルヴァ書房)
- 中川 美保子(2003). 過剰な攻撃性を表出する青年への援助について 京都大学大学院教育学研究科紀要, 50, 413-425.
- 中山 留美子・中谷 素之(2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 中山 留美子(2008). 自己愛的自己調整プロセス—一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて— 教育心理学研究, 56, 127-141.
- 宮下 一博(1991). 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家族の雰囲気との関係 教育心理学研究, 10, 35-44.
- 岡野 憲一郎(1998). 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社
- 高橋 哲・藤生 秀行(2015). 非行少年の自傷行為の経験率とその心理的機能 カウンセリング研究, 48, 75-85.
- Tangney, J. P., Wagner, P., Fletcher, C. & Gramzow, R.(1992). Shamed into anger? The relation of shame and guilt to anger and self-reported aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 669-675.
- 寺崎 正治・岸本 陽一・古賀 愛人(1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.
- Tracy, J. L., & Robins, R. W.(2004). Putting the self into self-conscious emotions: A theoretical model. *Psychology Inquiry*, 15, 103-125.
- 渡邊 卓也(2009). 他者からの拒絶に対する反応と自己愛人格との関連 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, 18, 90-91.
- 山崎 俊輔(2008). 青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連 九州大学心理学研究, 9, 143-151.
- 吉田 彩乃・浦光 博(2003). 自己卑下呈示を通じた直接的・間接的な適応促進効果の検討

実験社会心理学研究, 42, 120-130.